

国立民族学博物館の収蔵品 59

民族衣装は伝統的？



国立民族学博物館のアメリカ展示場の展示コンセプトの一つは「歴史的な文化変容」である。「出会う」、「食べる」、「着る」、「祈る」、「創る」という五つに分かれた展示コーナーのうち、「着る」に注目してみよう。南北アメリカの多様な環境に適応した色鮮やかな民族衣装展示の脇に、ちょっと見慣れた姿の男性マネキンが立っている。毛糸の帽子をかぶり、手でウクレレのような弦楽器チャランゴを抱えている。日本人が好むアンデスの民族音楽フォルクロレの演奏家だといわれても不思議ではない。アンデスの男性のイメージにぴったりである。じつは、この展示の趣旨は、まさにそのイメージが歴史的に創られたことを伝えることにある。

まず男性マネキンで目立つのは、チャランゴであろう。アンデスでは、笛や太鼓の類は古代から使用されてきたが、弦楽器はスペイン人による征服以降に持ち込まれたことが知られている。

つぎに衣服に目を転じてみよう。とくに男性マネキンの横にあるアクリルケースに収められた織物と比較してみると興味深い。ケースに

展示されているのは、南米の太平洋岸に成立した古代アンデス文明で製作された織物や装飾品である。たとえば、マネキンの頭には毛糸の帽子が見られるが、スペイン人による征服前のアンデス社会では、帽子はごく一部の地域や文化で用いられたにすぎず、大半の男性の頭には帯が巻かれていた。

マネキンが羽織る素敵なベストや上着も、征服後にヨーロッパから持ち込まれたものであり、もともとは貫頭衣であるボンチョを纏うことが多かった。古代のボンチョの織りはじつにみごとである。

では、下半身は何をはいっていたのであろうか。マネキンはズボンをはいているが、これももちろんヨーロッパ起源である。それ以前はというと、展示ケースにあるような禪である。こうしてみると身に着けたほとんどの衣服がヨーロッパ起源ということになる。

例外としてはサンダルがあげられよう。おそらく、古代では皮や植物繊維が使用されていたと考えられるが、マネキンはくサンダルの材料は変わっている。古タイヤである。

このように私たちが一般に持つ、民族のイメージは、征服の過程でもたらされたヨーロッパ起源の文化が取り込まれて成立したものであって、太古の昔から連綿と受け継がれてきたというものは少ない。しかし、だからといってこれをまがい物と考えることが正しいとはいえない。征服され、強制労働や強制布教など数々の困難を抱え、限定的とはいえ、主体的な取捨選択を行いながら築き上げてきた文化なのである。展示を通じて、悲惨な歴史とともにたくましく生き続ける民族文化の力を読み取ることができれば幸いである。